

今号の  
表紙画家

## 過去と現在が交差する十字路

林 正彦さん(高24回) インタビュー・構成／福澤郁文



● はやし・まさひこ

1953年 飯田市三穂生まれ。1977年イタリアに渡り、50〜60年代イタリア現代美術を中心に学ぶ。ペルージャ美術アカデミア卒。1995年から地元産の赤土「中村ブラウン」を使った作品の発表を続ける。その後各地で毎年のように個展開催。2010ブルガリア、ミニ絵画コンベンション。2015年 飯田市立石ギャラリー南無3人展開催。映画を観ている時間が好きで、ジム・ジャームツシユのファン。

——現在の作品の表現になるまでに、どのように学んできたのですか。

1970年代の日本の美術界は激しく揺れ動いていて、自分もアカデミックな方向性に疑問を感じていました。そして、ある美術館で目にした現代美術の魅力に強く惹かれたのです。それで、77年にイタリアに渡りました。ここでは伝統的な価値観から抜け出し新しい価値観を求めている時代の流れがあり、とても刺激を受けました。

イタリアにはフレスコ画の伝統があり、街の中の朽ち果てた壁やフレスコ画のベースになる壁の色など芸術的です。土の世界には茶道や禅の世界にも通じる美があり、帰国後は土をベースにした表現に取り組み始めました。

——伊賀良の土(中村ブラウン)との出会いはどのようにして?

もう25年ほどになりますが、ある雨上がりの日、周辺を散歩しているとき、

松の木の緑の中に出現した赤い土に出会ったんです。そのコントラストに感動して「よし! この土で表現してみよう」と。

——抽象的な作品の中にイメージしている世界は?

金属って危ういものなんです。土の安定感に比べたらね。それは人間が抱えているのと同じ危うい世界。どんな金属だって土の中で溶けてしまふ。強そうに見えるけど、土の安定感に比べたらその変化には危うさすら感じる。いまの社会と同じ。表現しているときにそうしたものが無意識の中にある。

人間が支配的なものではない世界、空から見える世界とか、過去と現在が交差する十字路とかね。イタリアでは、両極端の意見があっても生きていけるが、日本はそういう社会じゃない。だから頑張りたい。最近、ある人からマダガスカル島の鉛を戴いた。それを表現につかい、部屋のなかでも楽しめる小作品も制作している。金属の生まれた永い時間と宇宙をもイメージできて、おもしろいなとおもう。